

まいづる元気人 Vol.54

ひと目 10万本のアジサイの海

舞鶴市の北東に位置する大浦半島の豊かな自然に囲まれた舞鶴自然文化園。園内には、約100種10万本のアジサイや約1,500種3万本のツバキがあり、毎年開花時期には多くの来園者でにぎわいます。同園では6月8日から初夏の風物詩「アジサイまつり」が始まります。見ごろを迎えるアジサイのおすすめスポットや準備までの裏話を同園チームリーダー太矢正紀さんに伺いました。



舞鶴自然文化園
チームリーダー
太矢 正紀 さん

春になって暖かくなるとアジサイは休眠から覚めて芽を出し始めます。自然文化園では、見ごろを迎える6月までに肥料を与えたり、虫が付かないように薬をまいたりしてアジサイまつりの開催に備えています。梅雨時は雑草の成長が速いため、草刈りも行いますが、園内は広くて結構大変です。

今年のアジサイまつりは6月8日から始まり、園内はひと目10万本のアジサイの海に変わります。特に東屋付近から舞鶴湾を見たときの景色は気に入っています。手前にはアジサイが、奥には舞鶴湾とクレーンブリッジが一緒に見えてとてもきれいですよ。皆さんにもぜひ一度見てほしいです。

きれいなアジサイを見てもうらためには、しっかりとした管理が必要です。まず、アジサイが咲き終わった後、花がら剪定を行います。普通の花なら散ってなくなりますが、アジサイの花は木に残ってしまうために花がらを取り除く必要があります。機械が使え

ないので10万本全てを手摘みします。また、アシナガバチが活発な時期で葉の裏に巣をつくっている場合があります。気をつけていますが毎年スタッフの誰かが刺されています。10万本もあると特に注意しないといけないのが花の病気のまん延です。園内は広いため病気になる治療は難しく、チーム全員で予防活動を行っています。例えば落ち葉をかき集め、園内から持ち出します。これで病気の原因菌を園内で越冬させないようにする。そうして病気のまん延を防ぐことで、来年もきれいに花を咲かせてくれます。また、異常気象などで梅雨に雨が降らなかつたりすると、池から水を汲み上げてまいたりと、いろいろと準備は大変ですが、来てくれたお客さんにアジサイを見て感激してもらえるとやっていて良かったと思います。

前に、観光バスで来られた団体のお客さんが「きれいだったんで今回は個人的に来ました」と改めて来園されたときは「しっかりと整備してよかった」とやりがいを感ぜました。

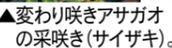


▲園内に広がるアジサイの海

樹木医を目指す
現在、樹木医の資格取得を目指しています。昔から植物に触れることが好きで、幼稚園の頃はよく祖父母と一緒に畑に行ってジャガイモやダイコンなどの収穫を手伝っていました。大学でも植物に関することを学び、縁あって今の仕事に就きました。そのときに職場の先輩から樹木医の資格があることを教えてもらったのがきっかけです。

樹木医は樹木の管理など7年以上の実務経験が必要です。そして樹木に関する実験などのレポート提出し、初めて筆記試験が受けられます。合格した後は、実習と

マイブーム
小さい頃からアサガオが好きで今年も育てる予定です。以前、図書館で変わったアサガオがあるのを知って、今年は10種類を育てようと思います。これは江戸時代からある品種で遺伝の法則に従って一定の確率で咲くのですが、普通の丸い形ではなく花弁が細く裂けたり反ったりしてとても不思議です。1種類あたり300本を育てる予定で敷地が必要で大変です(笑)。



▲変わり咲きアサガオの咲き(サイザキ)。

小児救急医療を考える

～小児科医師からのお話～



～プロフィール～
小松 博史 先生 (高知県出身)
舞鶴医療センター母子保健・小児医療センター部長。
小児科専門医・指導医(日本小児科学会)、腎臓専門医(日本腎臓学会)。同センター小児科のブログを公開中。詳しくは、「maidurupediatrics」で検索を。

日頃の子どもの様子をよく知り、もしもの時の備えが大切

子どもの急な発熱などで、病院を受診した方がいいのか、しばらく様子を見て大丈夫なのか迷ったことはありませんか。今回、「子どもの様子がいつもと違う」などと感じた時に、知っておいてほしい対処法や日頃から考えておくべきことを、舞鶴医療センター母子保健・小児医療センター部長の小松博史先生に伺いました。

日頃の子どもの様子をよく把握し、かかりつけ医と相談を

子どもの救急医療を考える上で大事なことは、日頃から子どもの健康状態をよく把握しておくことです。例えば、食欲や機嫌、活動性、顔色、排泄の状態などです。これらを保護者がしっかりと把握した上で、子どもの症状によって、「しばらく様子を見るのか」「かかりつけ医に相談するのか」「すぐさま救急医療を受診するのか」といったことを、かかりつけ医と事前によく相談し、準備しておくことが大切です。このことにより、子どもの様子がいつもと違った時や発熱など心配な症状であっても慌てず、しっかりと観察でき、適切な判断や受診

につながるようになります。このように普段から何でも相談できる「かかりつけ医」を持つことは、病歴などを踏まえた適切な指導が受けられとても心強いものです。

また、小さい子どもの発熱は髄膜炎を発症することもありましたが、近年は子どもの髄膜炎に対するワクチンが普及し、発熱に対する病気のリスクが減ってきています。このような病気に対する新しい知識を知っておくことも大切です。

病院への上手な受診を

発熱などの症状が昼間にあっても、夜になってから不安で来院されることがよくあり、18時～19時の間の電話相談も多くあります。その気持ちはよく分かりますが、夜間になるとどうしても病院の医師は手薄になり、小児科医師による診察が難しい場合があります。こういった病院の診療体制もご理解いただき、できる限り昼間の診療時間内に受診・相談していただくなど、上手に病院を受診してもらえたらと思います。

「#8000」の活用を

平日の夜間や土日、祝日において、子どもの病状を気軽に相談できるダイヤル「#8000」が開設されています(下記に関連記事)。病院への受診は必要ないと思っても受診が必要である場合もあり、特に夜間に受診するべきか、様子を見るべきか迷った場合は、「#8000」をご利用ください。このダイヤルの開設は平成16年から始まっている全国的な取り組みで、医師や看護師が相談に応じてくれます。

京都府小児救急電話相談「#8000」のご利用を

小児科医師や看護師が電話相談に対応。発熱、打撲、おう吐など夜間に子どものことが心配になった場合、お気軽にご相談ください。詳細は、右のコードからも確認できます。



《電話番号》「#8000」または「075・661・5596」
《開設時間》19時～翌朝8時
※土曜日(祝日、年末年始を除く)は15時～翌朝8時

子どもの急病への対処法(パンフレット)のご利用を

市では、小さなお子さんの発熱やおう吐など、症状に応じた対処法を紹介したパンフレット「こんな時どうするの?子どもの急病への対処法」を作製。市内の主な公共施設へ配置しています(市ホームページにも掲載)。郵送を希望する場合は、電話で地域医療課(☎66・1051)へ。



▲子どもの急病への対処法(パンフレット)

【コンビニ受診を控えましょう】

コンビニ受診とは、休日や夜間の時間帯に、緊急性のない軽度の症状であっても、自分の都合により安易に病院の救急外来を受診することです。できる限り、通常の診療時間内に「かかりつけ医」を受診しましょう。